

令和 5 年 6 月 26 日現在

機関番号：32621

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00383

研究課題名(和文)19世紀イギリス小説史の正典形成とセンセーショナリズム

研究課題名(英文)Literary canons and Sensationalism

研究代表者

永富 友海(NAGATOMI, Tomomi)

上智大学・文学部・教授

研究者番号：60305399

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究はメインストリームの作品と大衆小説が共有するセンセーショナリズムの言説を探り当てることで19世紀イギリス小説史の正典性をめぐるイデオロギーを解読した。近年の文学史の見直しにおいて、センセーション・ノベルの参入は文学史の構造的変革をもたらしたが、その領袖であるWilkie Collinsに比して、M・E・Braddonは当時の社会の階級的侵犯に関わる言説と深く結びつきながら、十分な検証が成されているとは言い難い。正典への格上げを狙った文筆活動や雑誌編集に携わったBraddonを糸口とすることで、センセーショナリズムの作用の広がりを明らかにし、文学史における正典性のイデオロギーを分析した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

この数十年間にわたりイギリス文学の領域ではジェンダー、階級、人種のマイノリティに焦点を当てる批評の流れのなかで正典を巡る変化が着実に進行している。正典作家たちが巧みに回避した結果、英文学史の死角となっている当時の言説に切り込む本研究は、従来の英文学史からすっぽり抜け落ちている欠落を埋め、英文学史の正典形成のイデオロギーを明るみに出し、文学史の新しい見取り図を描き出す一助となるものである。

研究成果の概要(英文)：This project aims at elucidating the ideological working of the canon formation in the history of the 19th century British novel by scrutinising a certain discourse of sensationalism that main-stream canonical novels and popular fiction share. The discourse is that of the pretty horsebreaker, Victorian courtesans, who, regardless/because of their sensational notoriety as a cross-class threat to the "fashionable" world, are rarely found in the contemporary canonical fiction, thus creating a literary vacuum in the history of nineteenth century British novel. M. E. Braddon, now a prompted canonical author, deserves further investigation in that her radical sensationalism extends to the taboo; she is far from reluctant to include the pretty horsebreaker in her work. Her direct reference to the courtesans as well as her other sensational strategies does break the literary vacuum, thereby providing an elucidation on the mechanism of canon formation in the 19th century literary history.

研究分野：英文学

キーワード：センセーショナリズム 正典形成 大衆小説 19世紀イギリス小説 Mary Elizabeth Braddon

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 研究代表者はこれまで 19 世紀イギリス小説を「結婚」と「相続」のプロットから読み解くために、身内/他者のレトリックの分析を軸に研究を遂行してきた。分析の切り口としては以下の段階を踏み、それぞれ科研費の補助金によって研究の遂行、発表を重ねてきた。

従兄弟・姉妹

亡妻の姉妹/亡夫の兄弟

私生児・売春婦

この過程で、結婚・相続というイデオロギーを裏面から補強してる負の要素 いわゆる「墮ちた女」と称される売春婦 の認知に決定的な偏りがあることが判明した。

(2) ディケンズをはじめとする正典作家たちがその作品で描く売春婦は、労働者階級出身の女性が生活苦から身を持ち崩す、もしくは「墮ちた女」の原義に基づき、中流階級の女性が道を踏み外すというパターンを踏襲しているが、実は英文学・文化研究の領域で従来完全に見落とされてきた「高級娼婦(スキットルズ)」という存在が極めて重要な意味作用をもつという発見に行き着いた。高級娼婦の表象が見出せる英文学作品を調査していくうちに、M・E・ブラッドンによるセンセーション・ノヴェルの分析の必要性を認識すると同時に、彼女の非センセーショナルな小説において、家庭という属性を持つ女性の「空想癖」が、本来父権制への脅威となりうる危険な要素を巧みに囲い込む装置として機能しているという仮説を導き出し、この両者への注視が、イギリス小説史の正典形成を読み解くための有効な方法論たりえるのではないかと考えるに至った。

## 2. 研究の目的

(1) 当研究では、19 世紀イギリス小説のメインストリームの作品と、周縁に位置する大衆小説としてのセンセーション・ノヴェルが共有する「センセーショナリズム」の言説を明らかにすることで、19 世紀イギリス小説史の正典形成のメカニズムの一端を解明することを目的としている。それにあたって参照枠とするのが、ウィルキー・コリンズに比べて研究の進捗が遅れているセンセーション・ノヴェリスト、M・E・ブラッドンである。当時絶大な人気を博した馬の調教師 (horse-breaker) と、その派生語である pretty horse-breaker を異名とする高級娼婦をめぐるセンセーショナルな言説の存在が本研究の糸口であると同時に核となる。これらの言説を、ブラッドンのセンセーション・ノヴェルと対置させ、他方でブラッドンが「センセーショナルでない」ことを意図した、つまり正典への格上げを狙った作品において造形した「夢想癖のある」ヒロインを、当時一大センセーションを巻き起こしたイザベラ・ロビンソン裁判の文脈に位置づけることによって、正典性の高い諸作品における不義密通や私生児の表象との差異を明らかにし、センセーショナリズムのレトリックに潜む社会的文化的イデオロギーの特性を剔出する。

(2) この数十年間にアメリカ文学のみならずイギリス文学の領域でも、ジェンダー、階級、人種のマイノリティに焦点を当てる批評を基盤として、正典をめぐる変化は着実に起こりつつある。特に 19 世紀小説においては、センセーション・ノヴェルと呼ばれる大衆小説群への注目が 1980 年頃から始まり、メインストリームの作品に対する転覆的な力を秘めたジャンルとして盛んに批評の俎上にのぼるようになってきた。こうしたセンセーション・ノヴェルの台頭は、単にこれまで軽視されてきた作品の見直し、あるいはアカデミズムのポリティックスによる格上げといった理解では済まされない重要な意味

合いを秘めている。センセーション・ノヴェルとはそもそも、結婚や相続をめぐる悪事や犯罪が秘密や謎を構成するというプロット重視の大衆小説を指す蔑称であったが、問題は、そうした小説群で描かれるセンセーショナルな事件や出来事が、19世紀のメインストリームの作家たちの作品にも共有されているという点である。不義の関係や重婚、私生児といった要素は、ディケンズ、ジョージ・エリオット、ギャスケル、トロロープ、ハーディといった大御所たちの作品にもれなく見出すことができる。彼らが物語の駆動力としてセンセーショナルな出来事を活用しているとするなら、メインストリームの作家と、周縁に位置するセンセーション・ノヴェリストを対置させるという図式の有効性はかぎりなく危ういと言わざるをえない。

(3) 従来の文学史では、正典性の高いプロンテ姉妹やディケンズの作品を、ゴシック・ロマンスの流れを組むリアリズム小説という括り方で説明してきたが、むしろそれらのテキストにはセンセーショナルリズムが流入しているというべきではないのか。しかしこのとき問題となるのは、ゴシック・ロマンスとセンセーション・ノヴェルの特性の差異である。前者は多分に「驚異 (the marvellous)」の領域に力点を置くのに対して後者はあくまでも「蓋然性 (the probable)」にこだわる。メインストリームの作品と大衆小説がともにセンセーショナルな要素を組み込んでいるとするなら、この両者を分かつ評価基準はどこに見出されるべきなのか。本研究は19世紀イギリス小説の正典形成がいかんして成されてきたかという「問い」に対するひとつの解答を提示する試みであり、同時に文学史の新たな見取り図を描き出す準備作業である。

### 3. 研究の方法

#### (1) M・E・ブラッドンに関する資料を徹底的に収集したうえで、作品分析をおこなう

ブラッドンの小説で入手可能なものは購入し、また購入不可の書籍に関しては、国内の大学図書館およびイギリスの大学図書館、ブリティッシュ・ライブラリの蔵書を確認し、複写閲覧をおこなう。

ブラッドンに関する当時の批評を探る。1860年代において、センセーション・ノヴェリストたちは大衆には絶大な人気を誇っていたものの、批評家からは不道徳であるという理由で糾弾されがちであった。なかでも女性であるブラッドンは頻繁に攻撃の対象となり、ミセス・オリファントやイライザ・リン・リントンといった同性のアンチ・フェミニストは、ブラッドンの描く「不道徳な」女性たちを非現実的であると批判した。それらの批評を調査・収集する過程で、同じくセンセーション・ノヴェリストとして人気を誇っていたウィルキー・コリンズに対する批判との比較を視野にいれた分析をおこない、非難の対象とされたセンセーショナルリズムの内実を特定する。

「高級娼婦」を明らかなモチーフとするブラッドンの *The Lady's Mile*、「高級娼婦」の特徴の片鱗をヒロインが担っている *Aurora Floyd* を再読し、両者に共通する「センセーショナル」なレトリックを炙り出す。

#### (2) イザベラ・ロビンソンの裁判に関する史料を収集し、裁判の背景を明らかにする。

彼女の日記にしたためられた不義についてのレトリックを分析し、加えて、裁判で彼女の不義を「夢想」にすぎなかったと結論づけた力の動きを探る。

ロビンソン裁判の判決で用いられた女性の「空想癖」という発想が孕むイデオロギーが、ブラッドンの *The Doctor's Wife* ではどのような効果をあげているかについて分析する。

#### (3) ブラッドンに比べて正典性の高い作家 ディケンズ、ジョージ・エリオット・トマス・ハーディに

おけるセンセーショナルリズムの特性を探る。

ジョージ・エリオットの *Daniel Deronda* における pretty horse-breaker のイメージを炙り出す。

トマス・ハーディの 作品群のなかでセクシュアリティという観点からもっともグロテスクな表象が散見される *The Woodlanders* をとりあげ、ハーディにみられるセンセーショナルリズムの特性を跡付ける。

トマス・ハーディの “An Imaginative Woman” の精読、および批評の読解を通して、「女性の夢想」という磁場を共有するブラッドン、イザベラ・ロビンソンとの比較分析をおこなう。

ディケンズの作品群のなかで、「家庭の天使」のイメージを強烈に備えていると見られがちである エスター・サマーソン (『荒涼館』) の私生児性に着目し、ディケンズにおけるセンセーショナルリズムの一例として分析する。

(4) 以上の作業を通して、19世紀イギリスの正典小説を支えるセンセーショナルリズムと、センセーション・ノヴェルにおけるセンセーショナルリズムの性質の重要な一端を明らかにし、正典形成に潜むイデオロギーの構造を特定する。

#### 4. 研究成果

(1) コロナの期間を挟んだため、国際学会への参加は叶わなかったが、国内の学会にはいくつか参加し、研究の成果を日本ハーディ協会のシンポジウムと日本英文学会のシンポジウムで発表した。

(2) 一次資料の収集をロンドン大学の Senate Library、ブリティッシュ・ライブラリでおこなった (2019年1~2月、2020年2月、2022年11月)。

(3) 本研究の成果を論文の形で結実させた。

センセーショナルな大衆作家として批評家からの批判にさらされがちであった M・E・ブラッドンがセンセーショナル・ノヴェリストからの脱却を図るために手掛けた *The Doctor's Wife* を当時の批評、当時の裁判 (Isabel Robinson の不倫をめぐる) とのインターテクスチュアルな関係性のなかで読み解くことによって、大衆作家ブラッドンがいかにセンセーショナルリズムのスペクトルを拡大することに寄与したかを、ブラッドンの憧れであり正典作家の第一人者であるジョージ・エリオットの *Daniel Deronda* におけるセンセーショナルリズムと比較することによって明らかにした。この論文は「『森林地の人々』における実験性」と題して『英国小説研究』に発表した。

Pretty horse-breakers の延長線上に位置づけられるトマス・ハーディのヒロインたちが、『森林地の人々』では彼がしばしば描くグロテスクな自然をさらに推し進めた形で表彰されていることをダーウィンとの関与性において明らかにしながら、ハーディのセンセーショナルリズムについて考察した。この成果は「波及するセンセーショナルリズム 『ダニエル・デロンダ』への一道標」と題して『英国小説研究』に発表した。

ディケンズが描く「家庭の天使」的女性像の代表格とみなされてきた『荒涼館』のヒロイン、エスター・サマーソンの脱性化されたかのような造型を、彼女の沈黙と私生児としての出自という観点から切り込むことによってそのセクシュアリティの在りかを特定し、エンディングの再解釈をまじえながらディケンズにおけるセンセーショナルリズムの特性を浮き彫りにした。その成果は「エスター・サマーソンの感情教育」として論文にまとめ、『英国小説研究』に発表した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 永富友海	4. 巻 58
2. 論文標題 Illness and Healing 19世紀イギリスにおける"Water Cure"をめぐる一考察	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 英文学と英語学	6. 最初と最後の頁 43-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 永富 友海	4. 巻 57
2. 論文標題 『サイラス・マーナー』における非リアリズム的物語空間についての一考察(1)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 英文学と英語学	6. 最初と最後の頁 21-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 永富友海
2. 発表標題 Bleak Houseにおける労働とlegitimacy
3. 学会等名 日本英文学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 永富 友海
2. 発表標題 Thomas Hardyと知の "dialogue"
3. 学会等名 日本ハーディ協会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 鈴木美津子、川崎明子、金子幸男、金谷益道	4. 発行年 2019年
2. 出版社 英宝社	5. 総ページ数 150
3. 書名 英国小説研究 No. 27	

1. 著者名 永富友海 他	4. 発行年 2023年
2. 出版社 英宝社	5. 総ページ数 152
3. 書名 英国小説研究 No. 29	

1. 著者名 鈴木美津子、新野緑、川崎明子、永富友海、金谷益道、大西寿明	4. 発行年 2021年
2. 出版社 英宝社	5. 総ページ数 156
3. 書名 英国小説研究 No. 28	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------